

52 Hz

HIROSHI MUNAKATA

鯨たちに

目次

まえがき.....	vii
本文の記述について.....	viii
*	
第 1 章 Traveling	1
カードを用いて演じる現象の中でも、特に移動に主眼を置いたトリックを集めました。	
Split	3
4A を用い、観客の自由なコールに応じてカードトウポケットを行います。	
Vol-de-Nuit Hofzinser.....	6
筆者流のホフジンザープロブレムの解法です。本書では唯一ギャフカードを用いる手順です。	
Double Date.....	11
テンヨーのディーラーズアイテム『サプライズ手帳』にトリビュートした手順です。2 人の観客のカードが手帳に書かれた数字に従って現れます。	
第 2 章 Mental.....	19
いわゆるメンタルマジック寄りのトリックを集めてあります。	
Power of 'JUNISHI'.....	21
十二支のシンボルをすべて半分に切った「絵合わせ」の山があります。この中から観客に好きなカードを選んでもらうと、その結果が完璧に予言されていることが分かります。現象の異なるバリエーションも解説。	
Ariadne.....	30
演者は視覚的情報に頼らず裏表バラバラなカードの表と裏、赤と黒を判別します。	
The Equi-voyance Test.....	35
デッキから無作為に抽出されたカードを透視し、100%正確に言い当てます。	
第 3 章 Playing	41
箸休めのような章で、遊戯的に楽しんで作ったトリックが解説されています。	
Fake Monte Move.....	43
モンテムーブに見せかけてモンテムーブを行わない、マジシャンフーラーです。	
Psychokinpick.....	46
マジシャンが手をかざすと、デッキのトップカードがひとりで動き始めます。	
Rashomon Monte.....	49
観客に暗示をかけることで、カードが表向きになっていても当てられなくするスリーカードモンテ。	
第 4 章 Et Cetera	55

1 章から 3 章に分類されないカード奇術たちです。

Sinking Aces	57
A4 枚のうち、観客のコールに応じて選ばれた A がマットを貫通します。	
Closed Marriage-Brokers.....	60
演者と観客とで Q と K のペアを作っていきます。確認してみるとどのペアもスーツが不一致であることが分かりますが、ジョーカー2 枚のあいだを通すことですべてのペアのスーツが一致していきます。	
Awkward Rising.....	64
コメディ/サッカー風に演出づけられたライジングカードの手順です。	
第 5 章 Extra.....	69
おまけの章です。非カード奇術や、カード奇術にまつわる記事など。	
Crystal Clarity.....	71
テンヨーの『クリスタルボックス』にトリビュートした手順で、意外な現象が連続して起こります。	
ラブアダブバニッシュについて	77
ラブアダブバニッシュという技法について、筆者の観点からコツを詳述してあります。	
ルポールワレット用封筒について	83
ルポールワレットに用いる封筒の工作について素材選びから詳述してあります。	
*	
追補 Power of 'JUNISHI' 2.0 を成立させている法則について	89
あとがき	91
筆者について/謝辞.....	92

他の個体と異なる鳴き👉を持つ孤独なクジラは、過去 12 年間にわたって太平洋をさまよってきた。

米マサチューセッツ、ウッズホール海洋研究所の海洋生物学者である Mary Ann Daher と彼女の共同研究者たちは、米海軍の潜水艦追跡用水中聴音器によって記録された信号を利用し、北太平洋におけるクジラたちの動きを追跡した。

限定的に機密解除された記録によって示されたのは、52 ヘルツ付近で鳴くたった 1 頭のクジラが、1992 年以降毎年の秋と冬に海洋を巡回しているということだった。その👉は既知のいかなる種族にも当てはまらず、しかしながら明らかにヒゲクジラ亜目（シロナガスクジラ、ナガスクジラ、ザトウクジラが含まれるグループ）に属するものであった。シロナガスクジラは通常、15 から 20 ヘルツのあいだの周波数で鳴く。より高い周波数のこともあるが、Daher によると 52 ヘルツには至らない。ナガスクジラは 20 ヘルツ付近のパルス音を発し、ザトウクジラはそれより高い周波数となる。孤独なクジラはその足跡もまた、他の種族の移動パターンとは一致していない。

——『New Scientist』 2004 年 12 月 10 日、John Copley による記事
「Lonely Whale's Song Remains a Mystery」より抜粋、ムナカタ訳

まえがき

かつて奇術研究家の松田道弘氏は自身の著作において、
「ビデオの全盛期に活字による奇術解説という作業を続けていると、ときどき誰もいない森の中で木をきりたおしているのではないだろうかというような気がする 때가あります。」

と書いたことがあります¹。誰もいない森の中で木が倒れたとき、その音は存在するのか？つまり、誰にも聞こえない音は存在していると言えるのか……という有名な疑問に基づく、この著者流のレトリックです。とは言え松田氏の著作に観測者が存在していることは疑いようのない事実でしょう。少なくとも筆者がその 1 人です。松田氏が著作を発表していたころに比べると、現代は筆者のようなアマチュアマジシャンも含め、誰にとっても容易な発信の手段が与えられた時代となり、あちこちから自身の存在を訴えるような👉が上げられています。しかし無数の👉はただ雑音として受け流され、一瞬で忘れ去られていくものでしかありません。自分の👉がどれほどの人間にキャッチされているのだろうかという疑念に対する答えはいつそう曖昧模糊となり、表層的な言葉が上滑りするように溢れるばかりです。ひょっとしたらわれわれの孤独はますます先鋭化しているのかもしれない。

以降に続く、カード奇術にまつわるとりこめもない趣味を羅列したレクチャーノートは、すべての表現物と同じく、存在するのかさえ判然としない仲間へ呼びかける筆者の👉です。52 枚のカードというわれわれの共通言語に基づいて記述されているので、いちおう誰にとっても意味は通じると思います（たぶん）しかしどれほどの思いを込めて書かれた文章であっても、波長の合わなかった読者にとってはたやすく忘れ去られてしまうものに過ぎないのかもしれないし、それは最初から聞こえなかった音とどれほどの差があるのでしょうか。筆者としては、この周波数をキャッチしていただける観測者の方が 1 人でもいればと願うばかりです。

ムナカタ・ヒロシ

¹ 松田道弘『松田道弘のマニアック・カードマジック（東京堂出版）, 1996 より

本文の記述について

カード……基本的にはトランプのこと。

デッキ……1組のカード。

ポケット……数枚のカード。

パイル……カードの山。

エンド……カードの短辺。

サイド……カードの長辺。

スート……トランプの種類であるスペード、ハート、クラブ、ダイヤの総称。

A、J、Q、K……それぞれエース、ジャック、クイーン、キングのこと。

エキストラジョーカー……標準的なデッキには、スートと数を有する52枚のカードと、2枚のジョーカーが含まれている。このうち予備の位置づけのジョーカーを指す。

フェイス、バック……それぞれカードの表、裏のこと。

トップ、ボトム……デッキを裏向きで持ったときの上のほう、下のほうを指す。デッキが表向きの場合は、上のほうがボトムで下のほうがトップとなる。

二重鍵括弧『』……書籍、小冊子、レクチャーノート、レクチャーDVDなどを示すときに用いられる。

ダブルクォーテーション“”……トリックの作品名などを示すときに用いられる。

括弧「」……セリフや強調したい部分を指すときに用いられる。

筆者……このノートを書いたとされる人。

観客……手品に付き合ってくれる人。

演者……手品に付き合わせる人。

*

人名は基本的に敬称略としています。日本語圏外の人名や書籍名は基本的にアルファベット表記です。トリック名や技法名さらに原理名などに関しては、一般化した呼称として扱うときはカタカナ表記ですが、個人によって発表された作品であるという固有性を強調したいときはアルファベット表記を用いるため、同一対象を記述していても表記の異なる場合があります。

クレジット調査においては Denis Behr のサイト [Conjuring Archive](#) や [Magicpedia](#) などを部分的に利用し、知人からの情報も参考にしました。最善は尽くしましたが、調査の及ばなかった領域また事実を誤認している箇所などあるかもしれません。ご容赦ください。

解説は右利きの読者を想定して書かれています。左利きの方は、お手数ですが左右を読み替えてください。

第 1 章

Traveling

Split

現象

4A を用い、観客のコールに応じてカードトゥポケットを行う。

準備

——以下省略——

手法

——以下省略——

補足／雑感／参考

ポケットトリックには、少数枚の限定的なカードから生まれる小宇宙的な可能性の広がりという魅力があるように思います。とりわけ筆者は、4A というシンプルな手札だけでどこまでのことができるのか……という課題について考えていた時期があり、その成果のひとつがここで紹介したものとなります。

Split というトリックに内在するテーマをひとこと言えば、4A という最もシンプルな素材を用いた、広がりのある立体的な現象、というあたりが適当でしょうか。また方法論の面から言えば、マルチプルアウトやエキボックといった手法によって、当てものや予言ではなくカードトゥポケットという物理的現象を達成しているところが珍しいのではないかと思います。

——以下省略——

Split

Vol-de-Nuit

Hofzinser

現象

演者はAのツイスト現象をデモンストレーションし、Aがひっくり返る能力によって観客の選んだカードを当てるといふ。あらためて4Aにおまじないをかけると、選ばれたカードと同スートのAがひっくり返り、さらには観客のカードと入れ替わる。この交換は再び元に戻る。いわゆるホフジンサープロブレム¹の筆者なりの案。

準備

——以下省略——

手法

——以下省略——

補足／雑感／参考

手順のフィナーレでは、準備さえしておけばハートの4はどこからでも現すことができます。以前は筆者もデッキケースという簡易的な密室から取り出していました。しかしデュプリケートの疑いを消すには、デッキの中に「戻る」といった程度の帰着が適当なバランスなのかなと思うようになり、現在はもっぱらここで解説した手法を演じています。消極的な理由とも言えますが、ちょっとした考えオチのようなニュアンスも生まれました。デッキ以外のお好きなどころから出現させたい方はそうしていただいて構いません。

——以下省略——

Double Date —— 『サプライズ手帳』 のための手順

現象

演者は、トランプがかつてカレンダーとしても使われていたことを説明し、数字とトランプと暦の不思議な関係性を見せると言う。また、手帳からジョーカー1枚を取り出し、これは特別なカードだと言ってデッキの中へ混ぜこむ。観客2人に1枚ずつカードを引かせ、カードの表には、サイン代わりに観客自身の誕生日を書いてもらう。

1人目のカードをデッキの中に混ぜこむが、これは観客にも手伝ってもらう。演者の手帳を開くと、カレンダーには1日ごとにランダムな数字が書き込まれている。この数字について演者は、その日に生まれた人間ひとりひとりにとっての「ラッキーナンバー」のようなものなのだと説明する。観客の誕生日を聞いて、その日付に書かれている数字を確認し、デッキの同じ枚数目を確認すると観客のカードが出てくる。

2人目のカードもデッキに混ぜてから、誕生日をたずねる。同じように誕生日に対応する数字からカードを取り出してみると、それは観客のカードではなくジョーカーである。

手帳の横側に付いたジッパーを開く（最初にジョーカーを取り出した場所を確認する）と2人目の観客のカードが出てくる。

準備

——以下省略——

手法

——以下省略——

補足／雑感／参考

——以下省略——

第 2 章

Mental

Power of 'JUNISHI'

現象

12 枚のカードの山が 2 セットある。干支¹のイラストが 1 種類ずつ書かれた 12 枚のハガキを、すべて中央で切断したもの。1 枚のカードにつきもう一方の山の中でそれと一致するペアが 1 枚ずつ存在し、2 枚を合わせると動物のイラストが完成する。いわゆる「絵合わせ」のカード。

演者は、「直感に従ってカードを選ぶと、十二支の力と観客に備わった超能力によって不思議なことが起きる」「なおかつ毎回同じ結果になるので予言を 3 つ用意してある」と説明する。

まず観客の好きな山を選んでもらったあと、その山から裏向きで 1 枚選んでもらって、このカードだけ表向きにしておく。申だったとする。

両方の山のトップから同時に 1 枚ずつ見ていく。1 枚目と 1 枚目、2 枚目と 2 枚目……という風にカードを合わせていくと、基本的に絵は一致しないが、観客の選んだ申のところで一致する。

最後まで見ていくともうひとつ、酉^{とり}が一致している。

ここで 1 番目の予言を見ると、「もしうまく行けば、選ばれた干支だけ一致しています！」と書かれている。2 か所の絵が一致しているので微妙な空気が流れる。

2 番目の予言を見ると、「ひょっとして、ひとつ次の干支まで一致していましたか？ あなたの力が強すぎたんですね」と書かれており、この状況があらかじめ想定されていたことが分かる。

ここで選ばれたカードが 1 枚ずれていたらどの干支になっていたかを見てみると、未^{ひつじ}と丑^{うし}であることが確認できる。

最後に 3 番目の予言を見ると、「ひとつズレたら未^{ひつじ}や丑^{うし}になっていましたね。成功してよかったです」と書いてある。

——以下省略——